宇野浩二未発表書簡百三十通

―広津和郎・田中直樹・舟木重信・森谷均・中村光夫・小島政二郎日本文学報国会編輯部宛―

増田周子

ここに紹介する宇野浩二未発表書簡百三十通は、前号の神屋敷民蔵・斉藤茂吉ら宛「宇野浩二未発表書簡六十三通」に続くものである。今回の宇野浩二書簡百三十通のうちわけは、「文学界」を刊行した文化公論社の田中直樹宛六十九通、広津和郎宛四十四通、昭森社の森谷均宛九通、藤森成吉宛三通、小島政二郎宛二通、舟木重信宛一通、中村光夫宛一通、そして、日本文学報国会編輯部宛一通である。これら百三十通の書簡の所蔵先は、日本文学報国会編輯部宛の一通をのぞき、全て神奈川近代文学館である。日本文学報国会編輯部宛の一通は、田中登教授の所蔵である。心よくこれら百三十通の書簡を閲覧させて頂いた神奈川近代文学館および田中登教授にお礼を申し上げます。

これら百三十通の書簡は、宇野浩二文学の理解、宇野浩二の伝記研究、あるいは、宇野浩二をめぐる人間関係の理解などに役立つものと信じる。今後とも、宇野浩二の書簡発掘に努めたいと思う。

ここに紹介する書簡は、大正八年から昭和三十六年の永き期間にわたっている。書簡の配列は、発信年月日順にした。記載項目は、書簡番号、発信年月日（消印）、発信地住所、宛名住所、宛名人、封書・はがきの別、使用の用紙、郵便切手額などである。消印は切手がはがれていたり、インクがかすれていたりして、判読出来ないものもあった。なお、本文で判読しがたい箇所には□印をつけた。

本書簡の紹介を、心よく許可して下さった、ご遺族の宇野和夫氏、並びに、神奈川近代文学館および田中登教授に感謝いたします。なお、前号では、山野博史教授・堀部功夫教授に、本号では、神奈川近代文学館の藤野氏にいろいろとご教示頂き、お世話になりました。あわせて御礼申し上げます。

一　大正八年七月（消印　水戸／8・7・□）
神奈川県鎌倉町材木座三五五　進藤兵蔵様方
舟木重信宛（絵ハガキ―常陸那珂湊　海門橋）一銭五厘

今朝藤森が、こちらへ来るが都合はどうかと言ふ電報をうつた。今、その返事をうつべく町へ来た。麻布六本木から電報がうつてあるから、君の家を訪ねたもどりかもしれない。一緒に君を鎌倉にたづねてもいゝと思ふので、僕から出かけようとも思つたが、それ程までに気が進まないので、やはりこちらへ来て貰ふことにした。会つた上で、君とも会ふ様になるかも知れない。だが、それは判然しない。

島木氏が、国から子供衆上京して、一緒に鎌倉へ行くのだと云ふハガキを二、三日前くれた。今日あたり行かれたかも知れない。鎌倉では偶然あふ事が、まあ不可能か知らん？　皆さんに宜しくお伝へ下さい。兄さん御夫妻もまだご滞在か？　僕の仕事は未完、暑くて少し弱つた。君の「新小説」の作、拝見した。作としては、先月の方から特殊の力を感じる様に思つた。今月のは大きな問題のわりに、どこかで力が抜けてる気がした。

二　昭和三年九月四日（消印　箱根／3・9・5／前9―12）
箱根、湯ノ沢一ノ湯内より
東京市本郷区菊阪八二　菊不二ホテル内
広津和郎宛（絵ハガキ―Hakone Tonosawa）

御無沙汰。東京は暑いと聞くから、当分ここにゐる。三十一日晩こゝへ来た。都合して来ないか。その夜、小説を書くつもりで、その題を「ソドムの家」又は『水際の家』とし、傍に、「古（いに）しへソドムといふ古き都あり邪陰の人、サディスト、マゾヒスト等々栄えたり」云々と書いてゐる中に、知らず〳〵戯曲の形になつてしまつて、十四枚一気に書いたら、それがたたつて、昨日まで、病気（といつても氷とアスピリンで、冷やしたが、三十七度内外で喰ひ止めたとはいへ）の為、昨日まで遊んでゐた。明日あたりから、先にいつた

処女脚本をつゞけて見ようと思ふ。
同時に、パステルで画をかいてゐる。この次に会ふ時見せる。
九月四日
（注）絵はがきの写真に「これは芦ノ湖ナリ」という宇野の添え書きがある。

三　昭和三年九月十三日（消印　箱根湯本／3・9・14／前9―12）
湯ノ沢湯本より
東京市内本郷区菊阪八十二　菊富士ホテル内
広津和郎宛（絵ハガキ―箱根千条の瀧）　一銭五厘

昨日は失敬。
あれから、君の出版のことをいろ〳〵考へた末、やはり「その頃を語る」は好出版だと思ふ。
それから、空の旅に、要所々々の地図を附けて、僕が編纂してもよい。鈴木氏に君から頼んでくれないか。
それも、出版したら、いいと思ふ。一寸、君を元気づける為に一言。
「改造」も「文芸春秋」も、「新潮」も間に会はなかつた。少しのろ〳〵した。
君のオクサン、来られたらどうか。尚、牧野の小説、千七百枚ある。出来のいゝものだけで。
それを、何とかして、改造社の普及版（一円本）で出せたらと思ふ。僕も山本にたのまうと思ふ。君の御援助を乞ふ。
十三、午後　　宇野生

四　昭和五年十月二十六日（消印その他なし　手渡し）
広津和郎宛（封書　便箋四枚）

御無沙汰。
昨日、文芸春秋社で島田君に会つて、君の近況を聞いた。それから、直木がやつて来て、君に会つたといふことも聞いた。
直木が銀座キネマへ行かうといふので、入ると、彼の第二夫人が待つてゐた。
直木は最近村上に会つたことをいつて、彼女が今度は余程根深く怒つてゐるといふ話をしてくれた。
君も大凡そのことを耳にしてくれてゐると推察するが、彼女のいふことに大体無理がないと、僕は思つてゐる。

彼女は僕のワイフは勿論、僕の母も彼女の味方で、僕が、文学第一、母第二、彼女第三といつたことや、僕の方が妻より生残つたらもう誰とも結婚をしないといつたことや、（これは僕として、今考へると、一種の誇張、或はその場限りの放言であつたのではないかと反省してゐる。）等、々、みな彼女の気に入らない。さうなると、彼女は、――僕のことの外何も考へないといふ彼女は、孤独であるといふことを、直木にいつたさうだ。

僕はいつか君の父上の御病気を御見舞旁た君を訪ねた時、君から彼女の手紙を受取つたが、そのまま未だ開封しないで持つてゐる。

気をまぎらす為に、他所の土地へ行つて、老若二人の妓と友達になり、時々そこへ出かける。それは僕のワイフの少しも気にさわらない。が、僕は昨日、直木に会つた時、否、君に会つて、君から、彼女の手紙をもらつた時以来、甚だ心が動揺するのを感じる。――といふと、少し言葉が違ふが、だん〳〵心が憂鬱になつて来るのを感じた。第一、家に毎日ゐることも、それの一つの原因に違ひない。又、フラウをまぎらかせる為に、大石蔵之助の真似事のやうなことをして、二時間位の放蕩（といつて、僕のことだから、無論、新しい情人を見つけた訳ではない）をしてゐるのも、憂鬱になつて来た。

そして、一度女史と会ひたいと思ひながら、こんなに双方の感情がもつれ、こんがらがり、又暫く離れてゐた関係から、一人で彼女の家の敷居が跨げなくなり、一層僕の気の弱さは、未だ彼女の手紙をさへ開封してゐない。

こんな僕自身のハンモンを君に書いたところで、仕様がない訳だが、少しイキ苦しい日を送つてゐるので、君に心持だけ打明けたかつたのだ。

僕は君が君のお父様の神経に苦しめられたやうに、母とフラウの神経に苦しめられてゐる。

例の幼年倶楽部の新年からの連載物をみんな書いてしまつた。九冊か十冊かだ。書いても書いても金の足りないことは、ロシアのリルイにつの童話の、出しても出しても出し切れない財布を持つて当惑する男に似てゐる。

改造の十二月に、出来たら小説を書かうと思つてゐる。多分書けるだらうと思つてゐる。そして、以前書きかけた脚本は新年号の雑誌に書かうと思つてゐる。幼年倶楽部のつゞきものも、僕を憂鬱にさせたのだ。思ひ切つて一人で旅して来ようかとも思つてゐる。

又、菊富士へ帰らうかとも思つてゐる。

いづれお目にかゝつていろ〳〵。

十月二十六日　　宇野　浩二

広津和郎兄

五　昭和八年〈年推定〉一月五日（消印不明）

東京市下谷区上野桜木町十七より

淀橋区西大久保一ノ四四五

広津和郎宛（封書　便箋三枚）　三銭

昨日はわざわざ奥様御来訪下すつて、僕には何よりの物ありがたう。

昨夜、谷崎を訪問して、一緒にお伺ひしようと思つたところ、彼は外に用事があるといふので、少しぐづぐづしてゐるうちに、時間が遅くなつたので、かねて保高と約束した「文芸首都」の会があつたので、その方へ廻つた。谷崎は十日までは忙しいと云つてゐる。

ところで、御承知のことと思ふが、博物館に、「応挙館」といふのと、『九條公記念館』といふ、両方とも献上されたものが、去年の十二月二十五日に落成した由。これも御承知のことと思ふが、前者は応挙が名古屋の何とかいふ寺で目の治療をしてもらつたお礼にその寺の庫裡に、床の間の壁から、襖、松戸など、殆ど部屋一ぱいに、松竹梅（?）とか、鳥とか、龍とかを描いたもので、応挙の絵としてもいいものださうだし、その上、その建物が大変いいと云ふ。後者は、たしか九条家の奥の書院を移したもので、これは嬉しくも山岳の絵が、これも、襖、障子の腰（?）、床の壁などに、これは山水画が描いてある由。

この二つの記念館を特別の人にだけ見せてくれる、という事を、たしか去年の暮の新聞で読んだ。もし、仕事のお暇と、気持のいい時があつたら、僕は大抵家にゐるから、出かけて来ないか。今のところ、十一日か十三日かの午後のほかは九分通り在宅する。

八日に何處かに君だけ越されるさうだが、もし越されたら御一報をして乞ふ。

一月五日　　宇野　浩二

広津和郎様

六　昭和八年四月八日（消印　下谷／8・□・□／后4－8）

東京市下谷上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

倉島君より小説

嘉村君より随筆

承諾して来ました

倉島君は　千葉県市川市砂河原九一〇
嘉村君は　牛込区南榎町二十三　中村方

七　昭和八年七月二十五日（消印　下谷／8・7・25）
東京市上野桜木町より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

先達ては失礼しました。「文学界」二号の小説、牧野信一君と古木鉄太郎君から小説の手紙がきました。
古木君は中野区池袋北二丁目七十八
牧野君は芝区三円南寺町三十八
それから「文学界」一号に一頁の広告をしたいのですが、いくら位か、〆切いつかお知らせ下さい。広告は小生の本です。
七月二十五日

八　昭和八年七月二十六日（消印　下谷／8・7・26）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（封書　便箋二枚）　三銭

前略
今日、鍋井克之君から「『文学界』の表紙カット等御指定の〆切日までにお送りする。目下二科の製作その他講習会などあつて一寸多忙、（中略）僕も近々四五日どこかへ出かけたいと思つてゐるところ」と云つて来ました。
鍋井君の表紙とカットは雑誌のつづく限りつかへるものですから、お礼の方はなるべく特別にお出し下さいませんか。
それから、創刊号に僕の限定版の本の広告を一頁出していたゞきたいのですが、「三田文学」も「文芸首都」も「作品」もみな拾円でやつてもらつて居りますから、これも拾円で載せて下さいませんか。
この広告は紙型が今月中に出来ますから、創刊号広告の〆切までに間に合ひますから宜しくお願ひします。
以上乱筆御判読下さい。
七月二十六日　宇野　浩二
田中直樹様

二伸　小生の本を出す本屋は今度が処女出版でアルルカン書房と申します。その本屋の主人江口栄一氏が参りましたら、よろしく御引見おねがひいたします。

九　昭和八年七月三十日（消印　下谷／8・7・30／0－4）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

前略
先達てうつかり今月一ぱい或ひは来月五日までの「文学界」の小説引受けましたが、「文芸春秋」の九月号を引受けてゐたことを忘れてゐました。それで、創刊号のはカンベンしていただきたく存じます。
七月三十日

十　昭和八年八月一日（消印　下谷／8・8・1／后4－8）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（封書　便箋二枚）　三銭

昨夜は失礼しました。
先達ての二度の会（二度目は広津と貴下を除いた会）でも、昨日も、肝腎（？）のことを相談（或ひは聞くこと）を忘れてゐましたが、会員外の人に依頼する小説の稿料、随筆の稿料等のことです。無論、人に依つて差違はあるでせうが、大体の評準をお聞かせ下さいませんか。
まだ依頼の場合は手紙だけで、本人には会つてゐませんから、（稿料はたくさん出せませんが）とだけの断り書きで通してきましたが、もし直接作家に会つた時とか、稿料を聞いて来た時の為めにお知らせ下さいませんか。第二号には鍋井君の随筆をたのむ予定になつて居り、それには絵を入れてもらひたいと思ひますので、さういふ時の画料等のことも、他の人達の稿料も、初めのうちは安くてもガマンしてもらふことにしても、後にはもう少し出すとか、といふ風に――

八月一日　宇野　浩二
田中直樹様
二伸　忙しいので、まだ両氏のものは読んでゐません。

三伸　先達て申上げました通り、鍋井君の表紙とカットは雑誌のつづくかぎり使へるものですから、この方は少しフンパツしてお払ひ下さるようお願ひいたします。

十一　昭和八年八月十三日（消印　下谷／8・8・14／8－12）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

お手紙拝見－一昨日共同印刷の工場で小林君に会ひました。鍋井君から十二日附で「文学界のカットは注文の数だけ八分通り出来たが、表紙まだ出来ない。十二、十三日江州へ行き十三日夜帰る。十四日頃発送する」と云つて来ました。右お返事まで

十三日

十二　昭和八年八月十五日
田中直樹宛（封書　便箋一枚）　手渡し

鍋井君の住所は大阪市外石橋轟木十五です。
今日あたり鍋井君から、「文学界」のカットと表紙を送つて来ると思ひますが、昨夜アルルカン書房からこの紙型を送つて来ました。広告料は少し安過ぎますが、僕が埋合せしますから、目次の前後か、なるべくよい所へお載せ下さいませんか。

八月十五日朝　　宇野　浩二

田中直樹様

二伸　鍋井君から表紙とカットつきましたら直ぐ速達でお送りしますから。この方は画料すぐお送り下さいませんか。

十三　昭和八年八月十八日（消印　下谷／8・8・18）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

昨夜は御馳走さま。
さて、武田麟太郎君の住所をお知らせ下さいませんか。鍋井君の装幀カット着次第速達でお送りします。

十八日朝

十四　昭和八年八月二十三日（消印　下谷／8・8・23／后4－8）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（封書　便箋二枚）　三銭　至急

追伸

先程鍋井君の表紙速達でお送りしました。あの表紙は鍋井君の指定では今年一ぱいとなつてゐたやうですが、一両日後に彼は二科会の会員として審査の為めに上京しますから、そのとき彼に頼み且つ相談して、あの表紙を永久に使ふことにしてもらつた方がいいかと思ひます。

それで画稿料のことですが、（画稿料ばかり気にするやうですが、）表紙は家、カットは建具その他のやうなもので、原稿と違つて、一度で済むものですから、五十円ぐらゐが相当かと思ひます。一冊分の（原稿料）が百五十円で表紙とカットの五十円は高過ぎるやうですが、繰返し申すますが、表紙は十回でも二十回でも永久に、カットも永久に使へるものですから決して高くないと思ひます。そしてこれは、鍋井君が一両日中上京するものと見て、四五日以内に僕の方へお送り下さるかお届け下さいませんか。

次ぎに、原稿のことですが、二十日千葉で川端君に会つた時、彼は半分できてゐると云つてゐました。かく云ふ小生はまだ一枚も出来てゐません。自分のことを棚に上げるやうですが、原稿催促センモンの係を置いて、毎日、サイソクに廻らせるやうにしなければ、むつかしいかと思ひます。――この事はぜひお進めいたします。

八月二十三日　　宇野　浩二

田中直樹様

十五　昭和八年八月二十三日〔年月推定〕
田中直樹宛（封書　便箋一枚）　封筒なし

鍋井君は明日か明後日上京すると思ひますから、表紙とカットの画稿料僕の方へなるべく早くおとどけ下さいませんか。

二十三日　　宇野生

田中直樹様

十六　昭和八年八月二十五日（消印　下谷桜木／8・8・25／后0－4、芝／8・8・25／后4－8）
下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　速達　九銭五厘

今日、倉島竹二郎君から今月中に四五十枚の小説をとどけると云つて来ました。一体「文学界」の一号の編輯はどうなつてゐるのですか。？（さういふ僕がまだ二三日かかつて小説やつと一枚しか出来てゐませんが。）それにしても誰が編輯し、誰が催促（原稿の）に廻るのですか。これで雑誌が出るのですか???

十七　昭和八年八月二十六日（消印　下谷桜木町／8・8・26／前8－12、芝／8・8・26／后0－4）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（封書　便箋二枚）　速達　十一銭

昨日はいろ〳〵な苦情と忠告を致しましたが、小生受持の小説二十三日から始めて居りますが、昨日の晩になつても三四枚で、それも気に入りません。感激のない小説（自信のない小説）を無理に作り上げることは嫌ですから、今年一ぱいだけお許し下さいませんか。その他のものは書きますから。

あの第一回の相談会の時に「文芸春秋」に小説の約束があつたことをすつかり忘れてゐましたので、うつかり承諾したのです。その上、「文芸春秋」が九月号が未完で十月にその後を書くことになつてゐます。その外に「改造」の十一月号にも小説の約束がありますので、くり返しお願ひします。来年の二月号位にして下さいませんか。

同人諸氏にも誠に済まないのですが、お許し願ひます。

《それから、肝心のことになると、いつもお返事下さいませんが、困ります。鍋井君は今日来ますから、（将来随筆などを頼まねばなりませんから）画稿料のことなども、お返事ぐらゐは頂きたいと思ひます。》

以上、気が急ぎますので、乱文乱筆御判読下さい。

八月二十六日　　宇野　浩二

田中直樹様

十八　昭和八年八月二十八日（消印　下谷桜木町／8・8・28／前8－12／芝／8・8・28／前8－12）

下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　速達　九銭五厘

昨日は失礼しました。あれを小説にするのはやはり無理ですから、「小説私考」といふ題で感想を、林君の「青い花束」と『「改造」その他の批評』とこの三つにしてもらひます。その代り口述筆記でなく、二十九日一ぱい位でやるつもりですから、それで御勘弁下さい。

鍋井君には画稿料雑誌出来と共に送ると云つておきました。

十九　昭和八年八月二十九日朝（消印　不明）

東京市下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

前略――昨日鍋井君が見え、「文学界」の目次の上のカットを忘れたやうに思ふが、社長に聞いてくれ、といふ話でした。「もし忘れてゐたら、滞京中に描くから」と云つてゐました。至急お調べ下さいませんか。

八月二十九日朝

二十　昭和八年九月二日（消印　下谷／8・9・2／8－12）

東京市下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

先程は失礼しました。その時お話しました林氏の「青い花束」の批評の箇條書みたいなものと荒筋を書いた原稿五枚ほど出てきましたが、今の疲労した気持はそれを土台にして書いてもましなものが出来さうにありませんから、見合せさしていたゞきます。折角お約束した林氏に悪いですから、林氏にお会ひの節、このハガキを林氏に見せてあなたからあやまつて下さい。

二日夕

二十一　昭和八年九月六日（消印　下谷／8・9・6／前8－12）

東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

前略。原稿とる迄は矢の催促で、とつてからは音沙汰なし。表紙と校正もどうなつたのです。鍋井君の画料ぐらゐは、雑誌の発刊が後れるとしたら、鍋井君の帰阪前にお払ひ下さいませんか。断食も結構ですが、他に対してももう少し誠意を出して下さいませんか。

六日朝

二十二　昭和八年九月九日（消印　不明）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

拝復

一冊で（小説随筆感想）全部で百五十円といふ勘定は僕には分りませんが、かういふ分け方は他の人にお任し下さい。併し余り少な過ぎると思ひます。その事に就いては武田君と林君に御相談下さい。僕は御免蒙ります。それから僕は一両日中に旅行いたしますから、御用事の節はお手紙下さいましたら、内の者が旅先に回送してくれますからそのおつもりで——

二十三　昭和八年九月九日　手渡し
東京市下谷区上野桜木町十七より
文化公論社
田中直樹宛（封書　無地便箋一枚）〈校生と原稿在中〉

雑誌何日頃に出ますか。
人に聞かれて困りますので、その日をお知らせ下さいませんか。どこかの新聞の□□欄に雑誌の発行日が後れると出てゐたさうですが……。

九月九日朝　　宇野　浩二
田中直樹様

二十四　昭和八年九月十日（消印　下谷／8・9・10／后0－4）

東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

十五日〆切の原稿がありますので、今度は欠席さして頂きます。
九月十日朝

二十五　昭和八年九月十三日（消印　下谷／8・9・13／后0－4）
東京市上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

追伸
「文学界」を毎号送るところの追加――
豊島区長崎南町三ノ三八八五　原久一郎
赤阪区青山南町五ノ八十一　斎藤茂吉
中野区上高田町一ノ三四七　遠藤豊馬
中野区宮園五ノ十三　江口栄一
一昨日倉島竹二郎君が三十七枚の原稿を持参されました。いいものらしいです。
それから鍋井君に早く画稿料送つて下さらないと、随筆たのみにくいです。お願ひします。十四日午後川端君の家の会合はあるのですか。

二十六　昭和八年九月十三日（消印　下谷／8・9・13／前8－12）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）

前略
「文学界」毎号左の所へお送り下さいませんか。
本郷区上富士前町七十三　高島　正
麹町区九段三丁目十一ノ一　三楽内　山本東三
北海道室蘭中学校　坂東三百
それから鍋井君の所へ雑誌と一緒に画稿料お送り下さいませんか。
身びゐきするやうですが、今日の雑誌にあれほど前衛的なカットを出してゐる雑誌はないと思ひますから。

（鍋井氏の住所
大阪市外石橋轟木十五）

二十七　昭和八年九月十五日（消印　下谷／8・9・15／后0－4）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

追伸
「文学界」月々　市外吉祥寺八七五、田畑修一郎君、にお送り下さいませんか。それから、中山（評）、辻野（評）、嘉村（随）、牧野（小）、鍋井（随）諸君には皆二十五日〆切といってありますから、あなたの方から催促して下さいませんか。

二十八　昭和八年九月十五日（消印　下谷／8・9・15／前8－12）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

昨夜は失礼。中山君から「ゴオゴリの死とツルゲエネフ」といふ評論十枚（二十五日迄）に送つて来るといつて来られました。鍋井君にも随筆たのみました。僕は中山君の本の批評をしますから、二号のヨテイ入れて下さい。それから、今日嘉村君と牧野君にサイソク出します。中山省三郎君の所は杉並区阿佐ヶ谷一ノ六八七です。雑誌送つて下さい。他に杉並区鳥橋三ノ三二　辻野久憲君にもお送り下さい。鍋井君には今日おくります。

九月十五日朝

二十九　昭和八年九月十六日（消印　下谷／8・9・16／4－8）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

前略
古い知人で正直この上なしの野呂といふ人が小生の名刺を持つて伺ひます。どうぞ相談に乗つて上げて下さい。
それから北海道の坂東三百といふ人は「室蘭市舟見町十八、荒井

方」に越しましたから、「文学界」二号からそこへお送り下さい。

十八日出席します

嘉村君は病気の為めに随筆延ばしてくれといつてきましたが、牧野君から承諾してきました。そして、嘉村君の代りになる人が二人ありますから御安心下さい。

三十　昭和八年九月十九日（消印　下谷桜木町／8・9・19／□8－12）

下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　速達　九銭五厘

昨夜は失礼－倉島君の原稿、もう一度川端君に見てもらひ、もし那須君の小説のよくなかつた場合に使ふやうに補欠にとつておいたらどうでせうか。それにはあなたから倉島君に会があつて、同人が廻読したとき二三人の反対（といふ程強く書かないで）があつたので、二号に載せられなくなつた。（折角御寄稿いただいたが、と断書をして）と云つてやり、川端君、林君あたりに見てもらつてから返しても遅くはないと思ひます。これは小生がたのんだ原稿といふ意味でなく、今日大かたの作といへる新人はなかなかないと思ひますから。（忠井君のところへ雑誌が行つてないそうです）

三十一　昭和八年九月十九日（消印　下谷桜木町／8・9・19／0－4）

東京市下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

追伸

「文学界」の二号は小説その他一切休まして下さいませんか。「改造」の十一月号の小説が九月からあつて、十月号のを延ばしてもらひましたので。

それから毎号下記の人々に雑誌送つて下さいませんか。

本郷区曙町二十一　高野敬餘

秋田県湯沢町　田中　宣

京橋区京橋三ノ四

日本評論社　下村亮一

北海堂室蘭市舟見町十八
荒井方　　坂東三百

三十二　昭和八年九月二十日（消印　下谷／8・9・20／前8―12）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

前略
寄稿依頼の関係もありますから、佐藤春夫、堀口大学、舟木重信諸君にも雑誌を送つた方がいいと思ひます。その他、寄稿依頼したい人にはそれぞれ送つた方がいいと思ひます。あの送り先を極める会に間に合はなかつたのを残念に思ひます。

三十三　昭和八年九月二十日（消印　下谷／8・9・20／后4―8）
下谷区より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

追伸
下谷区谷中天王寺町三十四　中山議秀
この人は英語の達者な人ですから、毎号（一号から）雑誌お送り下さいませんか。
その他、今度武田君とお会ひになりましたら、今朝申し上げました通り、寄稿してもらふ為に、適当な人を御相談下され、お送り下さいませんか。僕の方は前にお願ひしました、田中宣、高野敬餘、坂東三百、その他を改めてお願ひしておきます。
・倉島君はなるべく三号か四号にでも載せていただきたく思ひます。「三田文学」では評判のいい人ですから。

三十四　昭和八年九月二十三日（消印　下谷／8・9・24／前8―12）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

前略、―先達て報告しました通り、小生は二号に書けないから知

れませんが、小生の依頼したのは二十五日になつてゐますから、ぼつぼつ催促して下さい。それから、誰に聞いても堀口君のものは非常にまづいさうですし、古木のも余り評判がよくありません。ひどいのは全体に創作欄らしくないと云ひます。とすれば、倉島君は二号に載せてもいいかと思ひます。――小生例に依つて多忙ですから御用事はお手紙でお願ひします。（ひよつとしたら、旅行します。）

◎鍋井君が表紙の色の濃過ぎることを不満に云つて来ました。

二十三日夕

三十五　昭和八年九月二十八日（消印　下谷／8・9・28／后4－8）

東京市下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

「文学界」近松秋江氏にもお送りねがいます。小生ヅボラしますが、小生のたのんだ人にどし〳〵催促ねがいます。もしかしたら来月十日頃迄旅行します。

九月二十八日

三十六　昭和八年十月三日（消印　下谷／8・10・3／后4－8）

東京市下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

一昨日は失礼。

次ぎの仕事を急ぎますので、六号雑記もお許し下さい。辻野君のも急いだので読み返してないさうですから小生が校生しませう。随筆を斉藤茂吉氏にたのんだらどうですか。急ぎますので乱筆です。

十月三日

小説の校正の出る日と時間をお知らせ下さいませんか。旅に出ますが、その頃に一度帰りますから。

三十七　昭和八年十月六日（消印　下谷／8・10・6／后0－4）

東京市下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

前略。「文学界」二号から次ぎの人にお送り下さいませんか。
大阪市南区千年町十六　中本弥三郎
小生の校正いつ頃出ますか。
十月六日朝

三十八　昭和八年十月九日（消印　上野桜木町／8・10・9／后0－4　芝／8・10・9／后0－4）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　速達　九銭五厘

婦人記者の方が持参されました校正、仕事の合間にちょつとしかけて見ましたが、原稿がないので出来ません。至急原稿をお送り下さるか、お使にお持たせ下さいませんか。
十月九日

三十九　昭和八年十月十八日（消印　下谷／8・10・18／后4－8）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

二十一日朝九時発の汽車で大阪に立ちます。一週間か十日京阪その他を廻つて来ようと思ひます。その為め二十一日の会出席出来ません。諸兄によろしく。

四十　昭和八年十月二十一日（消印　下谷／8・10・21／前8－12）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

これから旅に出ます。「文学界」二号遅いですね。「空しい春」お返し下さいませんか。
二十一日朝

四十一　昭和八年十月二十五日（消印　大阪天満／8・10・25／后0－4）
大阪より
東京芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（絵ハガキ　大阪阿弥陀池）　一銭五厘

待望の「文学界」第二号どうしたのですか。余り遅いと、よからぬ流言があるやうですから心配してゐます。
大阪にて
二十五日

四十二　昭和八年十月三十一日（消印　大阪中央／8・10・31／前8－12）
大阪より
東京市芝区片門前町二ノ六　文化公論社内
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

「文学界」の会御迷惑かけました。今日の汽車で帰京いたします。川端君からの便に小生が帰つたら「文学界」の会が開かれるとありましたので、お知らせします。
こんな時に催促して恐縮ですが、「空しい春」留守宅へお送り下さいましたか。
十月三十一日　大阪にて　宇野　浩二

四十三　昭和八年十一月三日（消印　下谷／8・11・4／前8－12）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

留守中に「空しい春」いただきました。倉島君の住所お知らせ下さいませんか。
十一月三日

四十四　昭和八年十一月四日（消印　下谷／8・11・4／后4－8）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

拝復

倉島君の住所わかりました。

改造社で許してくれましたら泡鳴論出します。併し、十五日頃になると思ひます。

十一月四日

四十五　昭和八年十一月八日（消印　下谷／8・11・8／后4－8）

東京市下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

昨日は失礼しました。出来る限りやるつもりですが、もしかしたら「泡鳴」一月号にして頂きたく、万一の用意に、その手筈をしておいて下さいませんか。

「文学界」の二号は牧野君と川崎君（他は読んでゐませんが）の創作がいいので安心しました。一号よりそれだけでもいいと思ひます。

十一月八日

四十六　昭和八年十一月九日（消印　下谷／8・11・9／后0－4）

東京市下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

前略

「岩野泡鳴」を延ばして頂く代りに、今年の三四月頃「尺牘」といふ二百部ぐらゐしか刷ってゐない雑誌に発表しました「思出話」（二十年程前の思出話でちよっと面白い物）＝（十枚位）に新しく近松秋江との交際二十年程前の思出話（七枚位）附足して全体で三節十六七枚のものよかつたら、十二日迄に書きます。折返しおたづねのお返事速達で下さいませんか。

十一月九日

四十七　昭和八年十一月十二日

封筒なし　便箋一枚

田中直樹宛

読み返してゐませんから校正ぜひお見せ下さい。いつ頃出ますか、折返しお返事下さい。

原稿中に書いておきましたが、雑誌の切抜いたのはできれば写して工場へお廻し下さいませんか。汚したくないからです。

十一月十二日　宇野　浩二

田中直樹様

四十八　昭和八年十一月十五日（手渡し）

東京市下谷区桜木町十七より

文化公論社御中

田中直樹宛（校正刷と手紙在中）

明日の会に出ます。

「文学界」一号と二号（それからずつと）中野区川添町四十六百田宗治君宅にお送り下さいませんか。

十一月十五日　宇野　浩二

田中直樹様

四十九　昭和八年十一月十七日（消印　下谷／8・11・17／后4－8）

東京市下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（封書　便箋二枚）　三銭

昨夜は失礼しました。広津と話がはづんで他の同人諸君と、あの家を出ると一緒に、「さよなら」の言葉も交さずに別れてしまひました。同人諸君の誰かにお会ひになりましたら、よろしくお伝へ下さい。

さて、一案ですが、「犯罪公論」が「文化公論」になり、兄弟（？）雑誌「文学界」が刊行されることになつた訳ですから、来年あたりから、「文学界」叢書などといふ名でなく、そのつもりで、同人の創作集や、同人が認めた人の創作集を、成功すれば、だんだんに、先づ最初に三冊位出して、順に出すやうな計画はどうですか。すると「文化公論」と「文学界」にその広告が殆どタダで出来ること、文学物なら新聞は読売新聞の広告一つでいいこと等のいい条件がありますから、そのうち林君などとお会ひになりました時、御相談な

すつたら如何ですか。

十一月十七日　　宇野　浩二

田中直樹様

五十　昭和八年十一月二十日（消印　下谷／8・11・21／8－12）

東京市下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（封書　便箋三枚）　三銭　至急

前略

◎小生の「子の来歴」を出版する本屋アルルカン書房はいろいろの事情で出版がおくれ、その為めに、「文学界」の広告料が支払へないのですが、あなたの方から大変きびしい催促をされました由、今のところあの本の出版は、あの本屋と小生とが共同で出版してゐるやうなものですから、あの広告料は小生が払ふものとして、その広告費は、小生を信じて、少し延ばして下さいませんか。

◎それから、新年号にも、あの広告を載せてほしいのですが、新年号のは、紙型を代へるつもりです。それは小生から二十六七日頃にお送りしますから、よろしくお願ひいたします。

それから、小生から、お願ひしましたと思ひますが、「文学界」を

中野区宮園五ノ十三　江口栄一

それから

麹町区下六番町十　里見　弴

神奈川県鎌倉町雪ノ下六四四　崎山正毅

◎この三人は創刊号からお送り下さい。そして此後ずつとお送り下さい。その代り小生には今後は毎号二冊で結構です。

◎それから「子の来歴」が今日中に本になり、その前に「子を貸し屋」の訂正したのを二三日中に武田君のところに送ります。それで小生から武田君にたのみ、新年号に「子を貸し屋」の訂正前と訂正後をしらべて「宇野浩二小論」を書いてもらふつもりですから、それを新年号のヨテイに入れて下さい。

◎田畑修一郎君の小説は来月五日に出来ます。田畑君の住所は

市外吉祥寺八七五です。

十一月二十日夜　　宇野　浩二

田中直樹様

五十一　昭和八年十一月二十六日（消印　下谷／8・11・26／后0－4）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）

「文学界」十二月号
本郷区上富士前町七十三
高島正氏と里見弴氏（これは送つてなかつたら、創刊号からずつと）とにお送り下さいませんか。
十一月二十六日　宇野　浩二

五十二　昭和八年十一月二十八日（消印　芝／8・11・28／4－8）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

いつも同じお願ひばかりしますが、「文学界」一号からつづけて、僕の名を上書きに書いて、次ぎの人にお送り下さいませんか、毎号。
芝区車町八　平井太郎
これは江戸川乱歩君の本名です。
明日川端君の会に出ます。

五十三　昭和八年十二月二日（消印　下谷／8・12・2／后8－12）
東京市下谷区上野桜木町より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

今日田畑君が小説原稿を持つて来られました。五十七枚（正味五十五枚）です。お使の方を下さいませんか。
十二月二日

五十四　昭和八年十二月二日（消印　下谷桜木町／8・12・2／后0－4　芝／8・12・2／后0－4）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　速達　九銭五厘

鍋井君から「ヨミウリ紙で「文学界」の表紙は中学校のリーダのやうだと云ふ評を見、まつたくと感服、あれは少々気になつてゐるので、万一やり直しをしてもらへるものならやらしてもらへれば気がスツとする」と云つて来ましたので、早速たのんでおきました。あなたの方よりもおたのみ下さい。

それからアルルカン書房の「子の来歴」の紙型間に合ひませんから、「文学界」新年号は前の紙型をお出し下さい。

五十五　昭和八年十二月三日（消印　不明）

東京市下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

田畑君の原稿と鍋井君から寄贈のカットが着きましたので、それを取りに来られるよう電話をかけさせましたら、「ダレモキマセン！」と電話をガチヤンと切られた由、こんなことは困ります。

百田宗治君に十二月号からお送り下さいませんか。

十二月三日

五十六　昭和八年十二月三日（手渡し）

東京市下谷区上野桜木町十七より

文化公論社

田中直樹宛（封書　便箋一枚）

この鍋井君のカットは寄贈となつて居りますから、そのまま受けることにし、新しい表紙を一枚描いてもらつた時はこの前より少なくて結構ですから、画稿料お送り下さいませんか。今度は鍋井君もああ云つて来たのですから、屹度いい表紙が出来、一年間使へるのですから。

十二月三日　　宇野　浩二

田中直樹様

辻野君は芝区新銭座の何とかアパートに越しましたから第一書房に電話でお問合せ下さい。

五十七　昭和八年十二月四日（手渡し）

東京市下谷区上野桜木町十七より
田中直樹御直披宛（封書　便箋二枚）

今日、鍋井さんからハガキが来まして、『今日「文学界」の田中氏より手紙をもらひ表紙の色校正、且つカットに書き改め下さるもよろしと云ふ次第だつたので、大いにいさみたち直ちにすぐ表紙カットをかき改めた。田中氏へは十日迄に送ると云つたが、明五日夕刻貴宅迄発送する故、受取次第すぐお知らせを乞ふ。

上下の色の部分は今度も大体あの調子にして置いた。これは新工夫のつもりでやつたので、別にいい効果もないが、あまりがらりと変るのも定見がないやうで雑誌そのものにも御迷惑故、カットや何月号のところを改良してみた。感じはすつかり変つたが、さて今度は何の感じかしらん』といつて来ました。三日附のハガキです。

くり返しお願ひします。こんなに心配してくれてますから、表紙変への礼として、（それにカット寄贈を合はして）三十円、鍋井君に画稿料お送り下さいませんか。

十二月四日　　宇野　浩二

田中直樹様

五十八　昭和八年十二月五日（消印　下谷／8・12・5／前8－12）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

「文学界」新年号の「子の来歴」の広告紙型に（あのままで）十二月十五日発売と入れて下さいませんか。

今度からお留守中にも電話の係の方、分るやうにして下さい。

十二月五日

五十九　昭和八年十二月七日（消印　下谷／8・12・7／后8－12）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘　至急

辻野久憲氏の「宇野浩二論」三十枚、明日午後取りに来て下さい。（使をお出し下さい）　小生の「泡鳴」は明後日朝にして下さい。

十二月七日　　宇野　浩二

六十　昭和八年十二月八日

田中直樹宛（封書　便箋一枚）　封筒なし

この辻野君の原稿は小生のことを少し褒め過ぎてありますが、可なりいいものだと思ひます。

尚、小生の「泡鳴」は、多事多忙の為めにこれからかかります。バリキをかけて、明日一ぱいお待ち下さいませんか。その代り六号用の中山省三郎君の「猟人日記」と「散文詩」の批評も書きますから。

尚、明日は土曜ですから、六号の方は月曜日まで待てるのですか。

十二月八日　　宇野　浩二

田中直樹様

辻野君の今の住所は

芝区新銭座町二〇工人荘205号です。

鍋井君のお礼おねがひします。

辻野君の評論題は同人の方と相談し、辻野君の了解を得た上で変へた方がいいかと思ひます。辻野君もさういつてましたから。

その代り六号雑記御免下さい。

辻野君の原稿は二段に組んだ方がいいと思ひます。原稿書きましたが、急スピードで書きましたから、誤字脱字があるでせうから、校正ぜひお見せ下さい。

いつ頃出るか折返し御返事下さい。

六十一　昭和八年十二月九日（消印　なし）

東京市下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

「岩野泡鳴論」明日午後とりに来て下さい。

十二月九日

六十二　昭和八年十二月十二日（消印不明）

東京市下谷区上野桜木町十七より

本郷区菊阪町八十二　菊富士ホテル内

広津和郎宛（封書　便箋二枚）　三銭

前略

ちよつと伺はうと思つて電話をかけたら、お留守、いつお帰りになるか分らぬと云ふ。用事は例の白水社の話で、君も聞かれたらうと思ふが、来春、白水社で、君の評論随想集と、嘉村君の全集（三冊の予定）と、僕の「枯木のある風景」（他に「枯野の夢」と「人さまざま」を入れたの）を一緒に出さしてほしいといふのだ。

嘉村君の方は極まった。君の御事情を聞けば、出版者にはまだ会はれない由、原稿の枚数が足りなくて返つてゐる由、君と出版社の間に立つてゐる人に悪い由、――白水社では、センエツだが、文学書を初めて出す本屋より、どうかして自分の本で出さしてほしい。つまり、三冊一緒に出したい。それには近頃飜訳本（岸田国士の「にんじん」の外が殆ど売れないから、といふこともあると云ふ。何れにしても君が前に本屋と約束されてゐるのを知りながら白水社から無理を云へないから僕からもう一度たのんでほしいといふのだ。

それだけの用事でちよつとお伺ひしたかつたのだが、もしそのうちお暇なら、一緒に散歩ぐらゐはお供したい。

僕の方は十四日の外、いつでもいい。

十二月十二日　　宇野　浩二

広津和郎様

六十三　昭和八年十二月十三日（消印　下谷／8・12・14／后4－8）

東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

二月号に、小生の方に寄稿してもらひたい人のこと、寄稿したいといふ人のことなどかなりありますので、その相談の会なるべく早くされたらどうですか。

十二月十三日

六十四　年月不明（推定　昭和八年十二月）

田中直樹宛（封書　便箋一枚）封筒なし

この一文は六号雑記のつもりで書いたのですが、こんなに長くなり、又、六号雑記には少し惜しい（？）と思はれますので、同人諸

兄の誰かと御相談下され、適当な場所に載せて下さいませんか。
読み通してゐませんから、校正見せて下さい。「岩野泡鳴」と一諸に——

六十五　昭和八年十二月十九日（消印　下谷／8・12・19／后8－12）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

向島須崎町下車といふのは、市電ですか、バスですか、詳しくお知らせ下さいませんか。
十二月十九日

六十六　昭和八年十二月二十日（消印　上野桜木町／8・12・20／前8－12／8・12・20／后0－4）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　速達　九銭五厘

辻野君の原稿の題名
「作家の内省——宇野浩二氏の近業——」と改題して下さい。
十二月二十日

六十七　昭和八年十二月二十五日（消印　下谷／8・12・25／后4－8）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

昨晩は失礼しました。これまでの「文学界」全部そろへて左記にお送り下さい。
杉並区荻窪町二丁目六十四　本多謙三
坂口安吾の小説九十一枚まで二月号にぜひお出し下さい。

六十八　昭和八年十二月二十六日（消印　下谷桜木町／8・12・26

／后0－4　芝／8・12・26／后4－8）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　速達　九銭五厘

「文学界」新年号の稿料いつお送りになりますか。これは小生のことだけでなく、田畑、辻野君など小生の手からのものもありますので、――この事この間の会でませんでしたので。
やつぱり会合はあんな花やかな所よりジミな所の方がコウノウがあると思ひます。

十二月二十六日

六十九　昭和八年十二月二十八日（消印　下谷桜木町／8・12・28／后0－4　芝／8・12・28／后4－8）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　速達　九銭五厘

「文学界」新年号の稿料早くみなに払つて下さいませんか。変なゴシツプが飛ぶとお互に困りますから。

十二月二十八日

七十　昭和八年十二月三十日（消印　8・12・30／后0－4）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

嘉村磯多君の書簡お持ちの方は、決して粗末にしません。写し取つて、直ぐ御返送いたしますから、誠に勝手ですが、小生宛にお送り下さいませんか。

東京市下谷区上野桜木町十七　宇野浩二

この文句を出来るだけ目に立つところへ、目に立つよう、「文学界」の二月号に御掲載下さいませんか。

十二月三十日

七十一　昭和九年一月六日（消印　下谷／9・1・6／后0－4）
東京市下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

二月号に辻野久憲君の「嘉村礒多と私小説」といふ評論出して下さいませんか。原稿は今日あたり来るかと思ひます。新年の「文学界」のより合ひなるべく早くしたらどうですか。

一月六日

七十二　昭和九年一月八日（消印　9・1・8／后4－8）
下谷区桜木町十七より
芝区片前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘　代筆

私儀二三日前から感冒にかかりまだ床についております上に三八度九度となつてます〳〵熱も下りませんのです残念ながら御伺ひ出来ません。私の方の三月号に推薦する作家は中山儀秀氏でその原稿は来月三日に出来る予定でございます。尚私は三月号は休ませて頂きたいと存じます。

代筆失礼いたします。

七十三　昭和九年一月十二日（消印　芝／9・1・12／后4－8）
東京市下谷区上野桜木町より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（封書）

一九三四年文壇への待望の校正　1～2ページのみ在中

七十四　昭和九年一月二十九日（消印　下谷／9・1・29／前8－12）
東京市下谷区上野桜木町十七より
芝区片門前町二ノ六　文化公論社
田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

前略

小生の今度の病気は感冒でなく他の病気ですが、大事を取つて来月十日頃まで休養するつもりで居ります。併し、中山議秀君の小説は遅くも来月五日まで出来る筈ですから、出来次第小生からお送り

申し上げます。

一月二十九日

七十五　昭和九年二月二日（消印　下谷／9・2・2／前8－12）

東京市下谷区上野桜木町十七より

芝区片門前町二ノ六　文化公論社

田中直樹宛（ハガキ）　一銭五厘

又々残念ですが、医師の許しが出ませんので、六日の会に出席できないかと思ひます。同人諸氏によろしく。

二月二日

七十六　昭和十一年三月二十三日（消印　下谷／11・3・23／后4－8）

東京市下谷区上野桜木町十七より

京橋区銀座二ノ四　昭森社

森谷　均宛（封書　便箋三枚）〈原稿在中〉

鍋井君まだ見えません。

明日ぐらゐかと思ひます。

同封の『旅路の芭蕉』は僕が嘗て一度も書いたことのない時代小説であることと、これの出た雑誌が「浄土」といふ人の知らない雑誌であることと、「遠方の思出」が随筆であるのに比べてこれは小説であることとで、これを入れたいと思ひます。その代り

高い山から　250大正九年作

旅路の芭蕉　170昭和十年作

軍港行進曲　167昭和二年作

これまで僕の書いた作の中で、

「高い山から」は僕の初期の代表作、「軍港行進曲」は僕の中期の代表作、「旅路の芭蕉」は前述の如く、僕の唯一の時代（現代をはる）小説であるばかりでなく、全く人の知らない小説といふ点で、恥づかしからぬ創作集になるつもりです。ところが、枚数が（遠方の思出）より五十枚ふえます。

どうです、思ひ切つてかういふ思ひ切つた中篇小説集を出してくれませんか。

『旅路の芭蕉』をとられる場合は『遠方の思出』失はない用心に、御返送下さい。

三月二十三日

森谷　均様

宇野　浩二

七十七　昭和十一年〔年推定〕三月三十一日　手渡し

東京市下谷区上野桜木町十七より

森谷　均宛（便箋一枚）

では、「遠方の思出」の原稿と「大切な雰囲気」を此の僕にお渡し下さいませんか。

いつか御恵与にあづかりましたのを、或る本屋に見せましたら、参考に貸してくれ、と云つて、それ切り戻して来ないのです。ところが、昨日、今日夕方、斉藤茂吉氏と会ふ打合せをしました時、あの随筆集の話が出まして、僕が余り褒め過ぎましたので、それでは明日お目にかかる時、本屋からもらつて差上げませう、と云ふことになつたのです。

あの校正いつ頃から出ますか。

三月三十一日

宇野　浩二

森谷　均様

七十八　昭和十一年五月十六日（消印　京橋／11・5・16／前8－12）

東京市下谷区上野桜木町十七より

京橋区銀座二ノ四　昭森社

森谷　均宛（封書　便箋二枚　他装幀の絵を描いた紙）速達　〈原稿校正在中〉

これで安心しました。

・これで表紙もきまつて安心です。

・最初の予定どほり、扉（前に送つて来た分）と、『高い山から』と『旅路の芭蕉』と『軍港行進曲』前篇、後篇と、みんな揃つたわけです。唯一つ、「軍港行進曲」は本文は前篇後篇となつてゐますから、誰か器用な方に

（その二）を（後篇）

（その一）を（前篇）

上の字を鍋井氏の字に似せて直して下さいませんでせうか。

さしあたに、（絵の黄色はなるべく強く）とありますこと御注意。

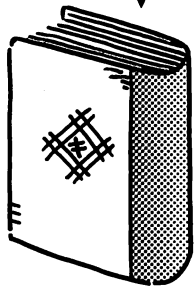
又

表紙　セナカは布又は革になれば同色のものにして、一見材料が変つてなきよう見えるように工夫されたし。

とありますところ御注意。

又、ゴタゴタ色が多くならぬよう希望する、ともあります。なるほど此の方が　金版が引き立つかと思ひます。

＊セナカは布又は革になれば同色のものにして、一見材料変つ（て）なきよう見えるように工夫されたし、表の金版との関係上



ゴタ〳〵色が多くならぬよう希望す。

五月十五日　　宇野　浩二

森谷　均様

（注）封筒裏日付「五月十六日朝」

＊鍋井克之の絵入り説明紙貼付

七十九　昭和十一年〔年推定〕五月二十五日　手渡し

東京市下谷区上野桜木町十七より

森谷　均宛（封書　便箋一枚）

お世辞でなく、なるほど鍋井君が（森谷氏なら）と云つただけ、これなら、いい本です。

サインを見返しにしましたのは、無闇に古本屋に売らないよう、にです。

今晩は、田山花袋先生の七回忌の会で留守にします。

明日も文芸懇話会で晩は留守にします。

明日午後も、留守になるかもしれませんが、その時は電話でお知らせいたします。

五月二十五日　　宇野　浩二

森谷　均様

八十　昭和十一年〔年推定〕八月五日（消印　□・8・6）

文京区森川町七十七より

千代田区神田神保町一ノ三　昭森社
森谷　均宛（ハガキ）二円

ごぶさたしてをります。ハガキで失礼いたします。小説はみな去年の中頃（あるひは末頃）からの約束のものがまだできてをりませんから、当分かけません。◎小出君の『大切なフンイキ』の残つた本ありましたら、一冊ほしいのです。◎『小出楢重』のかきおろしは大仕事ですから、これも当分おゆるし下さい。◎それより、ずつと前におヤクソクしました『回想の美術』（大下さんの雑誌レンサイ＝ただし百七八十枚）がありますが、あれはどうですか。（ただし、あれを出したい、といつて、あのキリヌキを原稿紙にうつしてくれた出版社がありますけれど。）
◎裕芽子さんの御住所おわかりでしたら、おしらせ下さいませんか。
あの人はそのご小説をやめられたのでせうか。

八十一　昭和十一年十月三日（消印　不明）
東京市下谷区上野桜木町十七より
京橋区木挽町三ノ二　昭森社
森谷　均宛（封書　便箋一枚）

この前、鍋井君と□新事務所を探して分らなかつたのは当然で、まちがつて松坂屋裏を探したのでした。
で、鍋井君が先月末から上京して居りますので、昨日会ひまして、昨夜、お訪ねしようと思ひましたところ、資生堂で人に会ひ、そのままになりました。
さて、旅行十日にたたうと思ふのですが、それまでに五十円御都合下さいませんでせうか。
「木□通信」どうなりましたか。
これは、僕のみならず、鍋井君も心配して居りました。
十月三日　宇野　浩二
森谷　均様
一番よまれる本の中にはひつた林（?）さんの本御恵与下さいませんか。

八十二　昭和十二年一月二十四日（消印　下谷／12・1・25／前8―12）
東京市下谷区上野桜木町十七より
小石川区大塚坂下町一〇二　昭森社

森谷　均宛（ハガキ）一銭五厘

拝復

僕と鍋井君は（僕の知る限り）あなたの出版の栄えることを会ふ毎に話してゐます。来る春を待望いたします。仰せのこと承知いたしました。〆切いつですか。お葉書で結構です、折返し御教示下さいませんか。

一月二十四日

武者小路さんの本が出ましたら、喜んで感想書きます。

八十三　昭和十一年十一月二十四日（消印　大阪中央／11・11・□／前8－12）

東京市京橋区木挽町二ノ三　昭森社

森谷均宛（封書　指定旅館ひさごや〈大阪市北区絹笠町〉製便箋一枚）

森谷　均様

いつか「軍港行進曲」ありがたう存じました。書きかけの小説を持つて、十七日の急行券を、十八日、十九日と延ばして、やつと十九日のツバメで大阪へ参りました。

が、書きかけの小説がまだ出来ませんので、それを完成して帰京するつもりです。

来月は久しぶりでお目にかかり、いろいろお話したりお話うかがつたりしたいと思ひます。

尚、来月七日（多分、この日が御都合のいい日かと思ひますが）頃、あの残りの分をいただけるよう御配慮下さいませんか。旅先きからの便りにかういふ事を書くのは、イヤな事ですが、一寸都合がありますので。

十一月二十四日朝

宇野　浩二

八十四　昭和十四年十一月十八日（消印　14・11・18／后0－4）

東京市下谷区上野桜木町十七より

豊島区池袋二ノ一二四三

藤森成吉宛（封書　便箋二枚）四銭

昨夜は失礼いたしました。

無心して御恵与にあづかりました『崋山と為恭』は御創作かと思ひましたら御研究でしたか。いただいてみると、お世辞でなく、これも誠に結構だと思ひましたので、『崋山と為恭』と、他に、貴兄の歴史を扱はれた小説（或ひは戯曲）がございましたら、御葉書で結構ですが、題名と発行書をお知らせ下さいませんか。

冷泉為恭はたしか長篇小説（読売新聞連載）があつたのは覚えて居りますが、渡辺崋山も小説か戯曲かになさつたやうに思ひますが、その題名と発行所をお知らせ下さいませんか。新刊批評などでなく、「文芸」にでも、貴兄の歴史物とでも題して、何か書かせていたゞきたいと思つて居ります。

「文芸」の来年二月号に間に合ふやうにしたいと思つて居ります。近日、別便で愚著（少し旧著ですが）お送りいたします。

十一月十八日　　宇野　浩二

藤森成吉学兄

（注）封筒裏に、次の鉛筆書きがある。

「崋山」「悲恋の為恭」「江戸城明渡し」来次第贈って下さい。

八十五　昭和十四年十一月二十八日（消印　下谷／14・11・28）

東京市下谷区上野桜木町十七より

豊島区池袋二丁目一二四三

藤森成吉宛（封書　便箋二枚）四銭

ふと、何気なく、無心しましたのが元で、『渡辺崋山と冷泉為恭』をいただきましたのが始まりで、思ひがけなく四冊も御本を御恵与にあづかりましたが、これを機会に、いつか申し上げました、貴兄の歴史物についての感想を、今かかつて居ります仕事が終りましたら、腰を据ゑて、書く気になりました。

思ふやうには行かないかも知れませんけど、十二月中頃から本式の準備をして今年ぢゆうに書き上げるつもりで居ります。かういふ事を前ふれしますと、却つて出来ない事がありますが、背水の陣のつもりで、つい書いてしまひました。

御期待くださらないように、書きましたら、御笑読下いますと幸甚です。

年でも変りましたら、御都合のいい時にお伺ひして、御所蔵の絵や画集を見せていたゞきたい、と楽しみに思つて居ります。

十一月二十八日　　宇野　浩二

藤森成吉学兄

二伸　僕としては『磔茂左衛門』を拝読した頃から書き始めたいと思つてゐます。

八十六　昭和十五年六月十四日（下谷　15・6・14／后4－8）

東京市下谷区上野桜木町十七より

豊島区池袋二ノ一二四三

藤森成吉宛（ハガキ）　弐銭

御本ありがたう。早速未読の『幡随院長兵衛』と『母ぎみ』を拝読いたしました。恥かしい話ですが、幡随院長兵衛の話は、うろ覚えにしか知りませんが、そのうろ覚えの記憶のと、貴兄の書かれていることが違つてゐることだけでも面白く拝見致しました。少しヒマが出来ましたので、近いうちに前進座を見るつもりです。『母ぎみ』はお町の出てくるところで涙ぐみました。

『わがいのち』は、「三四分会つて話をしてゐるつもり」を読むのにその三倍ぐらゐかかりました。普通の歌と違ふからです。「明日香」は、雑誌を見てから少しキマリ悪くなりましたが、『まづ……』と思って、昭森社から送らせました。あのデンセツはボクでない。前進座の歴史物の傑作と思ひます。

八十七　昭和十六年〔推定〕

封筒なし　便箋三枚　日付不明

宇野生

森谷様――

昭森社の特長（ママ）を発揮して、鍋井君に、佐藤君が指原氏に描いてもらつたやうに、この『遠方の思出』に若干挿絵を描いてもらつたら如何でせうか。

この小出君の手紙の後には

この手紙は昭和三年に私が貰つた手紙の最後のものであるが、「過々報知への小説とその挿絵の事は」云々とあるのは、多分私が、報知の小説は一旦中止したが、改めて書くつもりであるから、その時には是非お願ひするといふ意味の手紙を出したものらしく、その文句に対する返事の文句であらうと思ふ。ところが、昭和三年の暮れ頃から半年ぐらゐ私が可なり大病にかかつたので、報知の小説は、その間に書きつづける気が抜けて、そのままになつたのである。唯、この手紙の中で注意すべきは、「上京してても貴下のものを描

いて見度く思つてゐます」といふ文句で、最後の「描いて見たく思ふ」といふのは、明らかに武者小路実篤口調で、これが小出のやうな人にまでうつつてゐることと、この「描いて見たく思つ」た小出の挿絵は、私が大病にかかり、数年後に小出が死んだ事に依つて、私がよし新聞小説を書いても、結局、世に現れる機縁がなかつたといふ事である。もう一つは、小出が上京の気持があつたといふ事の一つの証拠になるといふ事である。

多忙のため、原稿に書くのをプシヤウしました。原稿紙に書き直して下さいませんか。

八十八　昭和十七年四月二十日（消印　下谷／17・4・20／后0－4）

東京市下谷区上野桜木町十七より

鎌倉市稲村ヶ崎四一三

中村光夫宛（封書　便箋二枚）五銭

お借りしました御本のお礼とお手紙のお返事おくれまして申しわけありません。

島崎先生は、会で数度お逢ひしただけで、二人でお目にかかつたことがありませんので、御紹介するのもどうかと思ひますし、御紹介してもどうかと思ひます。

それから、人聞きですが、「夜明け前」以前の時代を扱つた長篇にかかつてをられるといふことですから、逢はれるかどうかと思ひます。それに、もう七十二歳といふ御高齢ですし、二度目の外国旅行以来御健康があまりよくないとも聞いてゐます。しかし、亀井君と御一緒でしたら、どんなものでせうか。餘計なことですが、亀井君と御一緒でしたら、気がるなところもあるといふ話ですから、簡単にお逢ひ出来るかと思ひます。

そのうち、ゆつくりお目にかかつて、いろいろお話をうかがひたいと望んでをります。

自分のことを申しますと、十七八年前に或る新聞に書きました長篇小説を材料にしまして、書きおろしの長篇を、四五日休養してから、書き出さうかと思つてをります。二三ヶ月雑誌の小説を止めにしました。

しかし、一と晩ぐらゐでしたら、いつでも、お目にかかりたい、と思ひます。

とりとめのないことを書きまして、御ハンドク下さい。

四月三十日　　宇野　浩二

中村光夫様

八十九　昭和十七年十一月二十三日（消印　下谷／17・11・23／后0－4）
東京市下谷区上野桜木町十七より
大森区新井宿一丁目二三一〇
小島政二郎宛（ハガキ）　二銭

葉書で失礼いたします。
長い間お借りしておきましたドオデエの『巴里の三十年』の英訳を、今月の上旬、拙著と一しよに、お返しいたしましたが、もう一度お貸し下さいませんか。
十一月二十三日

九十　昭和十七年十二月三日（消印不明）
東京市下谷区上野桜木町十七より
大森区新井宿一ノ二三一〇
小島政二郎宛（封書　便箋一枚）　五銭

さつそく『巴里の三十年』ありがたう存じます。おくれながらお礼申し上げます。
また『眼中の人』ありがたう存じます。思ひ切つた書き方、といふ以上に、面白い小説と思ひながら、読了しました。これも、おくれながら、お礼申し上げます。
『眼中の人』は、面白いなかに、僕に、その反対のところも少しありますので、機会がありましたら、どこかで感想を述べたいと思つてをります。
十二月三日　　宇野　浩二
小島政二郎様

九十一　昭和十八年四月十一日（消印　下谷／18・4・12）
東京市下谷区上野桜木町十七より
世田ケ谷区世田ケ谷二ノ一〇六九
広津和郎宛（ハガキ）　二銭

前略。御無沙汰。この頃、人にあふと、君の『芸術の味』の話が出るが、僕に一冊おくつてくれないか。
この頃は、たいてい世田ケ谷のお宅にゐるか。
これはお返事を乞ふ。
四月十一日

九十二　昭和十八年四月十八日（消印　下谷／18・4・18）
下谷区上野桜木町十七より
世田ケ谷区世田ケ谷二丁目一〇六九
広津和郎宛（ハガキ）　二銭

それでは、足どめするやうでわるいが、二十日の午後四時頃おうかがひする。むろん、別に用事はないが、久しぶりでちよつと逢ひたいと思ふので。
四月十八日

九十三　昭和十八年四月二十九日（消印　下谷／18・4・29）
下谷区上野桜木町十七より
世田谷区世田ケ谷二丁目一〇六九
広津和郎宛（絵ハガキ〈満州国建国十周年慶祝絵画展覧会——北国の春・中沢弘光画〉）

せんだつては御馳走さま。
貴著まだ来ない。
今度奈良へ行かれたら、奈良から、幾日から幾日ぐらゐまでゐるか、（わかつてゐたら）知らしてくれないか。都合ついたらその頃、お邪魔したい。僕も奈良あたりに行きたいから。
菊池君の「新日本外史」はちよつと面白よ。
四月二十九日

九十四　昭和十八年五月十七日（消印　下谷／18・5・17）
下谷区上野桜木町十七より
世田谷区世田ケ谷二ノ一〇八四
広津和郎宛（絵ハガキ〈レモン・雑賀文子画〉）　二銭

本ありがたう。さつそく半分ほど読んだ。面白かつた。いつか聞いたが、今度奈良へ行かれる時、行けるかどうかわからぬが、お知

らせを乞ふ。

五月十七日

九十五　昭和十八年五月二十三日（消印　下谷／□・5・23）

東京市下谷区上野桜木町十七より

世田ケ谷区世田谷二ノ一〇六九

広津和郎宛（ハガキ）　二銭

前略、『芸術の味』読了、鍋井がよみたいといふので貸してやつた。275頁の『戦争の一挿話』は『西班牙犬の家』である。

先だつて、斉藤茂吉が便りのついでに、「文芸といふ雑誌の広津氏の随筆興味津々でありました。偶然よんで為めになりました。」と書いて来た。

五月二十三日

九十六　昭和十八年十二月十八日（消印　日本文学報国会／18・12・18／第□号

東京市下谷区上野桜木町十七より

東京市麹町区永田町二丁目一番地

社団法人日本文学報国会編輯部宛（ハガキ）　弐銭

坂東三百の『兵屋記』欠点はありますが、屯田兵を（その由来を）くはしく書いてあることと、この作者が十年ちかく屯田兵のことを書きつづけてきたことと、それ以上に屯田兵の一族が奮闘することがよく書けてゐることと結局、屯田兵を扱つた長篇として意味あることを認めるのです。

十二月十六日

九十七　昭和十九年二月二十八日（消印　下谷／19・2・28）

東京市下谷区上野桜木町十七より

世田谷区世田ケ谷二ノ一〇六九

広津和郎宛（ハガキ）　二銭

兄崎太郎二月二十七日朝急死しました。告別式の日は未定。

二月二十八日

九十八　昭和十九年四月二日（消印不明）
東京市下谷区上野桜木町十七より
世田谷区世田谷二ノ一〇八四
広津和郎宛（ハガキ）　三銭

兄の崎太郎の告別式の時にいただきましたお供物は、はげしい時局の折柄ですから、勝手ですが、町会を通じて、国防費の一端としていただく事にいたしました。いつも葉書で失礼ですが、右お知らせをかねて、重ねて、厚くお礼を申し上げます。

昭和十九年四月二日　　宇野　浩二

九十九　昭和十九年五月二十六日（消印　下谷／19・5・27）
下谷区上野桜木町十七より
世田谷区世田谷四ノ七二〇
広津和郎宛（ハガキ　松本城観光記念スタンプ付き）　三銭

前略。折角お知らせ下すつたのに原稿の遅筆のために半月すぎ、誘はれて、といつて、一人だが、十七日から二十一日まで甲府から松本へ行つて、昨日から月末頃まで盛岡とその附近に行つて来る。やはり一人だが、甲府にも、松本にも、盛岡へも知人がゐるからだ。来月の上旬おうかがひしたい。

奥さんによろしく。

・この間は、そのままゐれば、ちよつと□が面白いよ。

五月二十六日

一〇〇　昭和十九年十月十四日（消印　下谷桜木町／19・10・14／東京都）
世田谷区世田谷四ノ七二〇
広津和郎宛（封書　便箋二枚）速達　二十七銭

昨日は失敬。

あのアメは手紙をしらべたらネダンは次ぎのとほり。

一貫は百円、つまり百匁十円

これを世話してくれる人は新発田の住人で買ひ出しに行くのは新潟だから、使賃と手数料（つまりチップ）のやうなものがいるが、これは一割ぐらゐだから大したことはない。送料（カキドメ料）は別。

この世話人は今のところ希望なら、毎月、アメなら一貫目までなら何とかなると云つてゐる。

僕は三百匁申し込むつもりだから、もし君がお望みなら七百匁までだつたら当分（かなりの間）このアメは入手できるかと思ふ。

それで、この手紙と一しよに、この世話人にこの事を書いて、君から申しこみの手紙が来たら取り計らふやうに云つてやる。世話人の住所姓名は左のとおり

新潟県新発田町三味

斉藤　熊次

奥様によろしく。

十月十四日　　宇野　浩二

広津和郎兄

・昨日『赤と黒』といつたのは、また読みたくなつたのだが、上巻を人に貸しなくし、下巻だけはあるので、おついでの折り間宮君にもしよかつたら上巻を加納君にでもおあひになつたとき、おわたし下さるよう、たのんでほしい。

一〇一　昭和十九年十一月九日（消印　下谷／19・11・10）

下谷区上野桜木町十七より

世田谷区世田谷四ノ七二〇

広津和郎宛（絵ハガキ――浅間温泉・薬師堂）　三銭

前略

旅から帰つたのは二十九日だが、原稿を少し書きかけると、ケイホウ、ケイホウでキモノをきかへたりすることが、三四日つづいた。そのうちに、四国の船舶兵になつてゐる子に郵便で送れない軍刀をとどけなければならぬ日が来たので、四国ケンブツをかねて、十一日から五六日旅することになつた。それで、上旬におうかがひ出来なかつたおワビを申し上げる。

オクサマニヨロシク。

十一月九日

一〇二　昭和二十年七月六日（消印　20・7・6／前8－12）

歌舞伎座七月興行観劇会　寿海後援文化人の会　発起人より

熱海市天神町一〇〇七

広津和郎宛（往復ハガキ）往信二円

この度市川寿海（元寿海蔵）が関西一座を引連れて上京。寿海襲名披露興行を致しますにつき、知人宇野浩二、鍋井克之の肝入りにて、東京文化人の観劇会を開く事になりました、何卒御誘い合せの上にぎ〳〵しく御観覧御後援下さいますやうに御願申し上げます。

宇野　浩二
発起人　鍋井　克之
田近　憲三

期日　七月十八日　夜の部
会費御一名　当日の観覧料（六百五十円）と同額
食事その他は各自御自由のこと座席券は御手許まで郵送いたします。

・先月二十三日から今月一日まで、九州を半分足らず、まはつて来た。

後藤真太郎さんの所わかつたら……

宇野　浩二

一〇三　昭和二十五年五月十五日（消印　本郷／25・5・15／前8－12）

東京都文京区森川町七十七より
熱海市下天神町一〇〇七
広津和郎宛（封書　岩波書店原稿用紙10×20　二枚）　八円

拝復、さう思ひながら火災のおみまひも出さず失礼。先月十六日から十日ほど、大阪、おもに、奈良に行つてきた。奈良は六日ほど。その時、東大寺の橋本さんや、あの近くの柳澤さんが、君の火災のことを気にしてゐた。

さて、長沼氏はいそがしいだらうが、君なれば、こころよくあつてくれると思ふ。この手紙と一しよに、ききあはせの手紙＝速達を出し、返事きしだい、お知らせする。

『うつりかはり』――山本君などから聞いてゐたが、まだ雑誌こない、恐縮。

奥さまによろしく。文楽のとき、お目にかかつた。

五月十五日　宇野　浩二

広津和郎兄

一〇四　昭和二十六年六月八日（消印　本郷／26・6・8／后6－

12)

東京都文京区森川町七七より

熱海市天神町一〇〇七

広津和郎宛（封書　改造社原稿用紙10×20　二枚）速達　二十八円

前略。

中央公論社の人から、九州旅行に十五日に立たれる、と聞いたが、東京から途中下車せずに下関に行くのなら、東京を午前十時とか（くはしくは知らぬか）に出る「雲仙」号（急行）とかに乗れば、その汽車は、大阪から寝台になる、といふ便利があるさうだ。しかし、その寝台券をとるにはすくなくとも、五六日前でとれない、といふから、その事をお知らせする。

・それから、その汽車には、特別二等（トクベツ）といつて、普通の急行券より百円多く出すと、その「特別二等」に乗れる由。この「特別二等」といふのは、「ツバメ」についてゐる肘掛（ひぢかけ）の下のボタンをおせば、斜めになつて、寝られる仕掛（しかけ）のついてゐる、あれだ。しかし、その「特別二等」のキップも、乗車する日の少（すく）なくとも二三日前に買ひに行かないと、売り切れになる、といふから、その事をお知らせす。

六月八日　　宇野　浩二

広津和郎様

△「中央公論」の原稿まだできない。しかし、書きつづけてゐる、まにあはなくても。

僕は、ゆけば、大阪で一度おりて、一日ぐらゐ休みたい。

一〇五　昭和二十六年七月十三日（消印　□・7・14／前8－12）

東京都文京区森川町七七より

熱海市天神町一〇〇七

広津和郎宛（封書　筑摩書房原稿用紙10×20　二枚）　八円

このあひだは、思ひがけない写真ありがたう。あの写真は、とるべきところだけとつてゐるところと、およそイヤミのないところとに感心した。あの写真を見ると、どの写真を見ても、ホホエマシクなるところがある。ありがたう。

舟木さんの告別式も、林さんの告別式も、（あの日の六時三十分頃につく汽車で、帰つたので、）出られなかつた。残念であつた。

雲仙は、あそこへ行くまでの景色（大牟田から島原までのレンラ

ク船のあひだ）と、島原から三角（みすみ）に行くレンラク船のあひだの景色がよいぐらゐで、（島原の町はちょつといい）雲仙そのものは、案外、つまらなかつた。熊本の町のある部分と城がよかつた。一番よかつたのは阿蘇である。あれは、ただ壮大といふだけでもすばらしい。別府は俗な感じだけしかうけなかつた。それで、来年は、博多、長崎、鹿児島、霧島、その他に行きたい。

後藤さんの所ありがたう。

秋に、いつか聞いた（君に聞いた）一日だけ見せる仏像を見かたがた、奈良へお供したい。

七月十三日　　宇野　浩二

広津和郎兄

一〇六　昭和二十七年六月二日（消印　本郷／27・6・2／後0－6／熱海／27・6・2／後6－12）

東京都文京区森川町七七より

熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（封書　中央公論社原稿用紙一枚）速達　三十五円

前略

四日まへに君にお目にかかれると思つたので、奥さまあてに、入場券二枚だけおおくりしたが、今双葉旅館から番頭さんが来て、「十時頃お帰りになつた」と聞いたので、あわてて、入場券一枚同封する。

・六月二日　　宇野　浩二

広津和郎兄

二十六日から毎日――むろん、一昨日も、昨日も、早慶戦をヨソにして『芥川龍之介』かいてゐるが、今八枚のところ。つまり、一日一枚である。

一〇七　昭和二十七年七月二十八日（消印　本郷／27・7・28／後0－6／熱海／27・7・28／後6－12）

東京都文京区森川町七十七より

熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（封書　筑摩書房原稿用紙10×20　二枚）速達　三十五円

・今双葉にデンワかけたら、二三日前にお帰りになつたとのこと。

・君の方にも高来郡文化懇談会といふのから手紙が来て、その中に、

「加能越郎氏に御案内される」と書いてあるのを読んだと思ふ。

・ちよつとしらべてみたら、五日までに現地に行くのには、佐渡が一ばんよいやうである。佐渡は二た晩どまりでだいたい見られるらしいから、新潟で一と晩、と合せて三晩だ。それには一日の午前十時二十分（特別二等）の汽車で行けば、新潟に午後五時につく。新潟から佐渡までの船は三時間ぐらいの由。そのくはしい事は、こちらでしらべておくが、もし君がそれに御同意なら、特別二等のキップをとつておく必要があるから、否やを知らせてほしい。

・それで、もし佐渡に行くとしたら、現地へ行く道順がわからないので、その道順は加能越郎君に略図でをしへてもらふことにした。

七月二十八日　　宇野　浩二

広津和郎兄

一〇八　昭和二十八年十一月十七日（消印　本郷／28・11・17／前8－12／熱海／28・11・17／後6－12）

東京都文京区森川町七七より

熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（封書　中央公論原稿用紙10×20　一枚）速達

前略。昨日、新橋の『米村』のおかみ（『思ひ川』の女主人公）から電話がかかつてきて、

十一月二十五日の新橋演舞場の東をどりの切符四枚あり、その内、二枚を「広津先生と奥様に……」といつてきた。

これは、第一部で、午前十一時半よりはじまる。まり千代と小くにの出し物は「平家物語」で、「光淋」よりこの方がいくらかおもしろい、といふ。御返事乞ふ。

十一月十七日　　宇野　浩二

広津和郎兄

・ぼく、今日の日米野球戦みにゆく。

一〇九　昭和二十八年十一月十八日（消印　28・11・19／前8－12）

東京都文京区森川町七七より

熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（封書　筑摩書房原稿用紙10×20　三枚）　十円

昨日速達でおしらせした東をどり、もし熱海から直接おいでになるなら、十一月二十五日午前十一時半開演なれば、その頃、新橋演

舞場の玄関の会談をあがつた右側に行つて、「米村」がたのんだ宇野のキツプ、といつてくれたら、すぐキツプおわたしできるようにしてもらつた。

昨日、日米野球試合を六回まで見て、キツプがあつたので、新橋演舞場に行つた。まり千代の舞台は、キレイではあるが、踊りは振つけがよくないのか単調であつた。そこが六時頃にすんだので、銀座まで出るかはりに、ちかくの『米村』に行つて、カンタンな食事をしたところ、新橋演舞場の文学祭の話が出て、その晩に来た火野君に一枚だけキツプをもらつたからといつて、夫婦に同伴をさそはれたので、第一部のをはつた時分の時間に、行つてみた。声自慢はもとより、『父帰る』はふるくさく、『鈴ケ森』は久保田君の権八が、ふとつてゐるので、なにかモタモタしてゐて、思つたよりまづく、江戸川君の長兵衛はセリフに勢ひがなく、あれでは権八が江戸に行つてもたよつて行けないやうな長兵衛であつたから、権八は三点半、長兵衛は一点、雲助どもはヘタの面白さで四点ぐらゐ、――

結局、つまらなかつた。

廊下ではからず谷崎にあつたが、いきなり久米の話が出て、「僕たちも…」といつたから、僕が、「僕はそんなことはない、」といふと、谷崎は、青野もちかごろ片足が不自由になつて…とこぼしてゐた。谷崎のグチはなほらないね。

十一月十八日　　宇野　浩二

広津和郎様

・なるほどモラヴィアの『めざめ』はちよつとおもしろいね。あんなのならまづいいね。

一一〇　昭和二十八年十一月二十日（消印　本郷／11・21／0－6）
東京都文京区森川町七七より
熱海市下天神町一〇〇七
広津和郎宛（封書　改造社原稿用紙10×20　一枚）　速達　三十五円

拝復。東踊りの二十五日の切符、速達いただいてから、電話かけたら、「離れた席ならとれますから」といふことなれば、その事もたのんでおいた。だから、二十五日は、その離れた席のつもりで、おいで下さるよう、右お知らせまで。

△「中央公論」小説、いまだに、ナンザンナンザン。これはどうにも仕方のないことのやうだ。

十一月二十日　　宇野　浩二

広津和郎兄

・来月（十二月）は寿海が上京するので、鍋井がやつてくる。こんどは得意の『少将滋幹の母』を出すらしい。

一一一　昭和二十九年七月三十日（消印　不明）
東京都文京区森川町七十七より
熱海市下天神町一〇〇七
広津和郎宛（封書　原稿用紙10×20　二枚）

お見舞ひにうかがはううかがはうと話あひながら、先月の二十日頃から二人ともジンマシンにかかり、一人は手当てが早かつたので十日ぐらゐでなほつたが、僕は、はじめ蟲にさされたと思つてその薬をつけたために治療が手おくれになり、毎日朝と晩二回靜脈と皮下の注射を二つづつしてもらひ、二十五六日頃やつと直つた。それで、一と月以上不快な目にあつた。（そのためおうかがひできなかつた。）

自分のことばかり云つたが、御病気たいへん宜しい由、これは巷説どほり今年（ことし）の悪陽気のためにみんなやられたのだと思ふ。来月末頃には、御全快の由、どうか早くなほつてくれたまへ。

さて、御病中の御執筆の松川事件についての文章。僕は毎回感激して読んでゐる。いつか袴田さんが、君のあれを読んで、われわれの気のつかぬところを突かれてゐる、といつて感心してゐた。

・今年の秋十月頃にはあのパスを又くれるだらうから、その時は奈良や倉敷などにお供したいと思つてゐる。

奥様によろしく。

七月三十日　　宇野　浩二

広津和郎兄

そのうちおうかがひしたい。

これを書きをはつた時『泉へのみち』とどいた。ありがたう。

一一二　昭和三十年一月七日（消印　下谷／30・1・7／後6－12）
東京都文京区森川町七十七より
熱海市下天神町一〇〇七
広津和郎宛（ハガキ）　四円

謹賀新年

まだ熱海（そちら）にをられることと思ふ。さて、いつか能楽堂で宇野俊夫さんから話があつた新年お歌会はじめはこの一

月十二日の筈であるが、もし宮内庁から出席許可の通知があつたら、君は行かれるか。僕はこの寒さのために例の肩の神経痛のために少し弱つてゐるけれど、我慢すれば我慢できるので、宮内庁から通知があつたら推して出かけたいと思つてゐるが、……

それから、いつもお目にかかつた時にいひ忘れたのであるが、去年、鍋井から貴宅におくる絵が少しおくれる、と書いてきたのをつたへるのを忘れたが、もうついたかと思ふが……

一月七日

一一三　昭和三十年三月二十七日（消印　本郷／□・3・28／前8－12）

東京都文京区森川町七十七より

熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（便箋一枚）　十円

前略

おかはりないことと思ふ。

さて、鍋井からの便りの中に「広津君にさし上げる油絵（前のとは別に進呈）八号出来てそのままになつてゐる、送つてよい、ジキにお知らせ下されば幸甚也」と書いてある。

それで、御面倒だが、なるべく早く鍋井に右のお返事を出してくれないか。

三月二十七日　　宇野　浩二

広津和郎様

奥さまによろしく。僕ぼつぼつ腰をおしつけて仕事をするつもり。

一一四　昭和三十年十二月二十九日（消印　本郷／30・12・29／後0－6）

東京都文京区森川町七十七より

熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（封書　原稿用紙10×20　二枚）　十円

前略

鍋井から「広津君のところの拙作大きすぎること、初めて伝聞した。（これは鍋井の女弟子兼雑務係りの例の女史に伝言したので）あれは個人の宅では一寸大きすぎやしないかと心配してゐたもので、いつでもおとりかへする。ただし適当と思へるものいつでもあるわ

けではないから、よい時お知らせする。先日の梅田画廊の個展の時、広津君に見てもらへば好都合だつたが、いづれお知らせする。広津君にどうかよろしく」と云つて来た。

この事おつたへする。

僕、好な仕事にひつかかり、それにかかつてゐる。

奥さまによろしく。

十二月二十九日　　宇野　浩二

広津和郎兄

僕、来月八日頃、小説の題材のため、四五日大阪に行くつもり。

一一五　昭和三十一年五月十九日（消印　本郷／31・5・19／後0－6）

東京都文京区森川町七十七より

熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（封書　原稿用紙10×20　二枚）　十円

昨日は失礼。

大分よくなられた御様子で、ほツとしました。さて、昨日はなしました鍋井の展覧会は五月二十九日から六月三日までですから、もし行くとしたら、六月一日か二日のハトで行きたいと思ひます。その頃おからだの調子がよかつたら、大阪から奈良ぐらゐにお供したいと思ひます。

五月十九日　　宇野　浩二

広津和郎兄

一一六　昭和三十一年七月三日（消印　本郷／31・7・4／前8－12）

東京都文京区森川町七十七より

熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（絵ハガキ・札幌の時計台）　五円

今年は陽気は実に不順ですが、お体の工合はどうですか。

僕、先月の十二日から二十日まで、函館（湯の川）、札幌、定山渓、洞爺湖、登別、――とまはつて来ました。なにしろ、行き帰りが寝台車。北海道では、毎日汽車、自動車、バス、と乗り物ばかりでひどく疲れました。が、ちやうど新緑で、時には寒いくらゐでしたから、それだけは助かりました。こんどは足弱が一しよで、汽車

と船に弱く、僕が介抱役になりました。奥さまによろしく。
▲書いてから行儀のわるい書き方になり、失礼。

一一七　昭和三十一年七月二十四日（消印　本郷／31・7・25／前8－12）
東京都文京区森川町七十七より
熱海市下天神町一〇〇七
広津和郎宛（ハガキ）　五円

前略
長崎の本場のカステラもらひましたので、失礼ですが、半分おおくりしました。
さて、今日（七月二十四日）の午後五時頃、三四日前から弱ってゐましたネエルが、医者に注射をしてもらつた途端に、なくなりました。心臓マヒださうです。明朝、犬猫専門の寺に送り、墓は別の所にたてることになるさうです。右お知らせいたします。
お大事に。奥様によろしく。
七月二十四日

一一八　昭和三十一年九月七日（消印　本郷／31・9・7／後6－12）
東京都文京区森川町七十七より
熱海市下天神町一〇〇七
広津和郎宛（封書　便箋一枚）　十円

この数日来のむし暑さでお体の調子いかがですか。
さて、先日堺君がお見舞ひを兼ねて中国ゆきのことでおたづねした時、今中国に行くのは松川のことを書いてゐるので、……と断られたさうだが、どうです。十月末と云へばまだ二た月（ママ）つかく先きのことだし、僕も、久保田君と同じで、行つても二週間ぐらゐのつもりです。それに、ペキンにさへ行けばそれからはこちらの好みでどこへ行つてもいいさうですから、思ひきつて出かけませんか。
奥さまによろしく。
九月七日　宇野　浩二
広津和郎様

今日のヨミウリ新聞に、福島慶子さんが『谷崎コリイ』といふ題で、潤一郎さんから一対もらつたコリイが八匹の子を生んだと書いてをられたら（ママ）、御面倒ですが、一疋ほしいのですが、

おはなしくださいませんか。もつとも、押すな押すなの貰ひ手があるさうですからあきらめてゐますが。

一一九　昭和三十一年十一月十二日（消印　不明）

中国北京市新僑飯店より

日本国　熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（絵ハガキ　―北京頤和園長廊―　中国人民郵政明信片）航空　PAR AVION

十一月六日の午後十二時頃、羽田を飛行機で立ち、七日の午前八時すぎ香港につきました。飛行機は乗つてみると、案外に楽なもので、飛行機さへ行けば乗りたくなるやうになる。さて、香港から汽車にのり、英領と中国の国境を越え、広州（広東）につき、広州（革命の発祥地）で、飛行機の都合で二た晩とまり、十日に広州から武漢を通つて、北京まで飛び、その日は町を見物し、昨日（十一日）孫中山の誕生九十年の式に招待され、周恩来に会つた。実に気がるな人でした。今日（十二日）夜、中国の何人かの作家に逢つた時、ある作家が、君と僕が松川事件に関心を持つてゐること、君が毎月「中央公論」に松川事件を論じる文章を連載してゐることを、中国の作家たちが愛読してゐると喜んで話した。この分では半月のヨテイが二十日ぐらゐになると思ふ。中国に来てよかつたと思つた。

十一月十二日

一二〇　昭和三十二年八月八日（消印　本郷／32・8・8／前8―12）

東京都文京区森川町七十七より

熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（封書　便箋一枚）　十円

せんだつては結構なものありがたう。もつとも、卒直に云ふと、性来酒ぎらひの僕には「猫に小判」だが、家人と酒ずきの子供は大よろこびで、いただいた物はもうおなかに入れてしまつたやうだ。

さて、又、松川の現地調査のための講演に方々をまはられる由、どうぞお大事に。

お礼を申しおくれましたが、『美しき隣人』ありがたう。僕は「文学界」のほかは読んでゐないので、あの中の八篇のうち七篇は未読のものであつたから、読むのに楽しかつた。

奥さまによろしく。

八月八日　　宇野　浩二

広津和郎兄

僕は三月中頃から昨日まで四箇月以上、今秋、文芸春秋新社から出す文学評論めいた本のかきたしと訂正につぶしてしまつた。

一二一　昭和三十二年十一月八日（消印　天王寺／32・11・8／後6－12）

大阪より

熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（絵葉書――大阪・御堂筋）五円

赤目の絵葉書を出すつもりで書いたが、それをタクシの中に忘れたので、それがつかないかと思ふので、これを書く。

三日に五ケ月ぶりで旅に出て、大阪に来た。

六日に赤目に行つて一泊、今日（九日）帰京する。

旅は疲れるばかりだが、僕には旅よりほかに運動する法がないので、来月の初めに十日ほどの予定で九州に行くつもり。

奥さまによろしく。

大阪にて　十一月八日　　宇野　浩二

一二二　昭和三十三年一月十二日（消印　本郷33／前8－12）

東京都文京区森川町七十七番地より

熱海市天神町一〇〇七

広津和郎宛（ハガキ）　五円

謹賀新年

昭和三十三年元旦

もうおよろしいことと思ふ。ずつと前に鍋井にあつた時、あの絵の交換のことを心配してゐた。個展の時「広津君の気にいつたのを取つてほしい。」と云つてゐた。（一月十一日）

一二三　昭和三十三年九月二十二日（消印　本郷／33・9・22／後0－6／熱海／33・9・22／後6－12）

東京都文京区森川町七十七より

熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（封書　便箋二枚）速達　三十五円

前略

この間のお手紙によつて大へんお忙しいと思ふので書きにくいのだが、鍋井から又また次ぎに抜き写しするやうな手紙が来たので、気がねしながら、お知らせする。

広津君にはいろいろ借りがあるので、もしよろしければ、とつておいた八号を今回、荷物のついでに、東京へ他の出品作と共に送つておく。但し、どれか気に入るか推定しかねるので、個展を見てもらひ、一枚ひきぬき、それをお渡ししてもよろしく、このためには御迷惑でも、三十日（初日）に見てもらふと大変好都合なり。

三十日（初日）とは、誰も見ないうちに、といふ意であらうと思ふ。

もし御無理でなく、御無理だらうとは思ふけれど、三十日に高島屋に行かれるなら、御都合で、僕もお供したい。

九月二十二日　　宇野　浩二

広津和郎兄

先日、（一週間ほど前に、）「サンデイ毎日」の記者に無理にたのまれて、談話でいいと云はれ、君のことを話した。きまりのわるいものだが…

一二四　昭和三十四年七月八日（消印　本郷／34・7・8／後0－6）

東京都文京区森川町七十七より

熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（KOKUYOの便箋二枚）　十円

めづらしい物ありがたう。いつか加能君の建碑式のをり金沢の宿で「この辺の名物ですが、それは一と月ほど前がシユンで今は……」と云はれたことを思ひ出した。君は元気でうらやましいね。

僕は、神経痛が肩とか背中とか腰とかを中ぐらゐで体ちゆうをときどき（時間かまはずに）なやますので閉口してゐるが、そのスキマをねらつて、一枚、半枚、……と書いてゐるけれど……

『松川事件』――大詰にちかくなつて、しだいに明かるくなつたやうに思はれるけど、なにぶん相手が相手だからと陰ながら気をもんでゐる。

奥さま、その後いかが。僕の方、一人は不断の神経痛、片方は暑

さに人の数倍ほど負ける性分らしく、そのうちおみまひにおうかがひすると申してゐる。

閑談――僕は、五月のパスをふいにしたので、まつたく『トラヌタヌノカハサンヨウ』だが九月十日頃から十月十日ごろまで、十月十五日ころから十一月十五日頃まで、（これは定期）十一月中頃から十二月中頃まで、およそ九十日ぐらゐの間にまをおいて旅行したいと思つてゐる。

この間、どうしても断れない無名の雑誌にたのまれて、晩年の宮地のことを七八枚かいた。それを書いた動機のやうなものは今年の三月に宮地の生まれ故郷の佐賀市の公園の文学碑にきざまれた、

豆腐屋は近し
手軽な自炊かな
かろく

といふ文句である。

七月八日　宇野　浩二

広津和郎兄

一二五　昭和三十五年十月八日（消印　本郷／35・10・8／後0－6）

東京都文京区森川町七十七より
熱海市下天神町一〇〇七
広津和郎宛（ハガキ）　五円

長崎からのおたよりありがたう。又、小城よりの好物ありがたう。僕も数年かかつて、長崎、雲仙、天草、小倉、阿蘇、宮崎、別府、その他と、一週間つづぐらゐ廻ったが、やはり長崎は何度行つても趣があつて楽しい。

お大事に。

オクサマニヨロシク。家人よりもよろしく。

十月八日

一二六　昭和三十六年六月二十四日（消印　本郷／□・□・24）
東京都文京区森川町七十七より
熱海市下天神町一〇〇七
広津和郎宛（封書　原稿用紙ROCCO二枚）

広津和郎兄

その後はごぶさた。

今日、長沼さんから、同封のものをおくつてきた。

その長沼さんの手紙のなかに、

「広津氏の御要望の件事務当局に研究いたさせました結果同封のやうな結果と相成りました。これはかなり好意的な取扱と存じますので先づ先づ呑まれたら如何かと存じます、広津氏の御住所不明のため…」

とある。

その僕も君の御新居の所番地、（このあひだ鍋井と一しよの時、御名刺をもらへなかつたので、『不明』ゆゑ、前の御住所にして、この手紙を出す。

ぼく、雑誌その他の仕事をにげだしかたがた保養するために、近日、松本市外の浅間温泉にでも出かけようかと思つてゐる。

出かけても三四日

おおくりした『思ひ草』、今みると、キユウクツな文章と「かきかた」を痛感、あらためたい、と思つてはゐるが……

六月二十四日　　宇野　浩二

そのうち、お目にかかりたい。

電話　小石川(85)五八四九

一二七　昭和三十六年八月十六日（消印　本郷／36・8・17／後6－12　熱海／36・8・18／前0－8）

東京都文京区七十七より

熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（ハガキ）　三十円　速達

あれをラヂオや号外で知つた時は、「あツ、」といふ言葉より皆泣いてしまつた。

実は何といふことなく君にあひたかつたのに今日のおたよりを見て、これこそ云ふべき言葉がなかつた。一日も早くよくなつてくれ。大事にしてくれ。そのうち、あいたいね。

八月十六日

一二八　昭和三十六年九月十三日（消印　本郷／36・9・15／8－12）

東京都文京区森川町七十七より

熱海市下天神町一〇〇七

広津和郎宛（封書　便箋三枚）　十円

その後は御無沙汰、お変りないことと思ふ。

『松川裁判』を完結されてほつとされたことと思ふ。足かけ六年丸五年よくやられたね。

さて、先月（八月）二十八日に、文化放送の係りが来て、「友人として見た広津と『松川裁判』」といふやうな題目で、二十分ぐらゐ話をさせて録音に取つて行き、それを三十日の午後三時に、「広津先生の放送」があるからその中に入れる。「これから志賀先生のとこに行く」と云ひながら、その三十日の午後三時の放送に僕のを入れなかつた。僕としてはそれを君と松川の皆さんに聞いてほしかつたので、僕のをオミツトしたことを電話でなじると、その係りがやつて来て、どうしても入れようと思つて徹夜して苦心したが時間の関係でどうしても入れられなかつたと云つたので、僕はすんだことは仕方がないから、その事を広津君と松川の皆さんにつたへてくれ、是非、とたのんだ。

ところが、今月の十一日に大阪の朝日放送の東京支局の人が来て、やはり文化放送の人と殆んど同じ題目で話してくれと云つたので、その人に文化放送の時の話をしてあんな事があるとイヤだから、と断ると、その時、話のついでに、その朝日放送の土井といふ人が、「その事は広津先生はごそんじないやうです」と云つたので、右の事を書いた。

しかし、朝日放送の人がそんな事はめつたにありません、と云つたから、文化放送に話したのと同じやうな事を話したが、十一日はめづらしくカゼを引いて九度ぐらゐの熱があつたのと、おなじやうな事を二度はなしたので、文化放送の時より力のない話をした。これは、たしか、十六日の午後二時とかに、朝日放送で放送すると云ふので、もしそれを君が聞かれたらと思つて、この事も、例のごとくくどくなつたが、書いた。

それから、鍋井君からの手紙の中に、この月の三十日から十月五日まで高島屋で個展をする。その時、「広津君に進呈の作品を持参するが、どんなのが気に入るや、予測できないので、個展中の作品より選んでもらふのがよいかとも考へ、この件については上京ただちに貴宅に御相談に参上する。今のつもりでは、白浜の黒潮をかいた八号をあててゐる。ガクつき。」とある。

九月十三日　　宇野　浩二

広津和郎兄

〔注〕封筒の日付は「十五日」

一二九　昭和〔未詳〕年六月十三日
東京都文京区森川町七七より
広津和郎宛（封書　中央公論社原稿用紙20×20　一枚）中央公論社の使ひに託して、手渡し

前略
足をけがされた由、お大事に。
この品は、子が先だつてやつて来て、君が双葉にをられる、と聞いて、持つて行つたところ、お帰りになられたあとであつたから、失礼だが、中央公論社からお使ひが行く、といふので託した。
足をわるくされたのでは、十五日の九州ゆきは延ばされることと思ふ。僕は、十八日の早立野球戦を見てからにする。
六月十三日　　宇野　浩二
広津和郎兄

〔注〕「株式会社　林商会門司工場／宇野守道／門司市大里東町五丁目」の名刺が同封されている。

一三〇　昭和〔未詳〕年八月九日（消印　8－12）
東京都文京区森川町七七より
熱海市下天神町一〇〇七
広津和郎宛（封書　筑摩書房原稿用紙10×20　二枚）

六日に双葉旅館にデンワかけたら、「昨日おかへりになりました。」といつた。いつかの梅原さんの絵のことで、おたづねしたいと思つたのだ。
それで、笹原が来た時、気になるので、あの絵のハナシをすると、「広津先生は、宇野先生がおかひになるのだつたら…」といふやうなことをいつたので、米山さんに電話をかけた。
それで、米山さんに、あの絵かひたい、といふと、それでは明日（七日）にもう一度きいてみてお返事する、といはれた。
・けつきよく、米山さんが行かれたら、こんどは、八万といつたので、六万五千にした、といはれたので、あれ、買つた。
以上、お礼とおしらせまで。
・僕、ことによつたら、十一日頃から、また、箱根（こんどは塔之沢）に行つて、中央公論のを書くつもりだが、できるかどうか、アヤシキものなり。
八月九日　　宇野　浩二

広津和郎兄

・十四日以後御上京の時あればおたちよりを乞ふ。

（ますだ　ちかこ／関西大学院生）